

▶▶▶加藤 裕治

「おしゃべり」は、いま

コロナ禍の中、大学では教育だけでなく研究活動にも大きな影響が出ている。それは教員だけでなく学生も同様で、大学院生は特に深刻である。本学にも修士課程があるが、聞き取り調査なども制限され、苦戦した学生も多い。

幸い、私が指導する中国からの留学生はネットメディア研究でもあり、影響は少なく済んだ。論文の内容は、中国の人々が日本のテレビの（笑いを伴つ）バラエティ番組をどのように受容しているか、ネット上でのやりとりを分析したものだ。

結論は大変興味深いのだが、端的に言えば日本のバラエティは、ネット上での「おしゃべり」の話題提供に、とても向いているコンテンツだという。自国の番組だといふ本気で言い合いになってしまふ人々が、日本のバラエティを話題にすると、笑い話で収まるのだという。笑いのツボは文化の隔たりが大きいとの俗説もあるが、その学生によれば、中国の人々は日本のバラエティの内容を自身の身近な話題へと置き換えて、互いに楽しんでるらしい。

さて、コロナ禍の中では、こうした何げない「おしゃべり」の機会が減っている。仕事や授業を維持する対策は懸命に練られてきたが、「おしゃべり」の場の検討はあまり聞かない。会食も難しい中、人々はどこで「おしゃべり」をしているのか。

そんな不要不急のことを真剣に考える必要はない、と言われてしまつかもしれない。しかし、イギリスの進化心理学者、R・ダンバーによれば、言語の起源は「ゴシップ」おしゃべり」なのだそう。目的を持たない「おしゃべり」こそが、人々を近づけ親密さを生み出すのであり、それが（類人猿から進化した）人間の特徴だという。

そういえば最近、「クラブハウス」という会員制交流サイト（SNS）のアプリがメディアで盛んに取り上げられていた。音声のみで互いに会話するSNSのようだが、こうしたアプリが話題になるのも、そうした「人間らしき」おしゃべり」をいま、人々が求めている故かもしれない。

（静岡文化芸術大学教授）